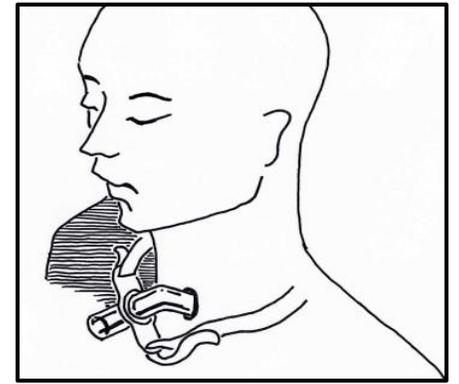


医療的ケアが必要な特別支援学校中学部生徒
に対する卒業後を見据えた自立への支援

生徒の実態（身体面）



気管カニューレ

- 中学部生徒
- 気管切開状態、気管カニューレ使用（声の出せるスピーチカニューレ）
- レティナの併用が開始となる（レティナに変更後、学校で3回抜去あり）
- 自立歩行可能
- 軽度の右片麻痺あり（以前は右利き、現在は左手で食事や書字をしている）
- 頸部内部の感覚が鈍感な状態であるが皮膚表面の感覚はあり
- 頸部にバンダナを巻き、登校している
- 昨年、保護者付き添い登校時、気管カニューレが抜去したこともあり

【昨年の気管カニューレ抜去時】

本人は抜けていることに気づかず、近くにいた担任が気づいた

生徒の実態（学習面）

発達検査結果より

【苦手なこと】

- ①受け取った情報を頭の中だけで整理すること
- ②記憶を保持すること

【関わり方】

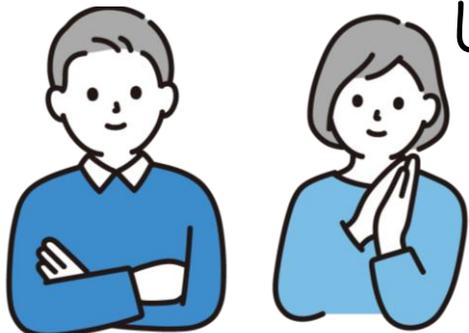
- ①具体的かつ簡潔に順序立てて伝える
- ②手順書やスケジュール表、写真を使用する、体験的な活動を取り入れるなど、記憶を思い出しやすい工夫をする
- ③記憶の定着をはかるため、短時間で繰り返し学習をすすめる

保護者の願い

【身体・健康面】 体を動かせる楽しみを少しでも取り戻していききたい
体調と相談しながらも、色々な事にチャレンジしていききたい

【学習面】 文字を書ける、キーボードを打てるように、手がスムーズに動かせるようになっほしい
限界を作らずあらゆる学習にチャレンジしたい

【社会生活面】 楽しい事を増やし、熱中できるものを探していききたい
自分でできることを増やし、色々なことにどんどんチャレンジしてほ
しい



キーワード

チャレンジ

体を動かす楽しみ

手がスムーズに動かせるようになっほしい

担任の願い

- ・他者に言われて気づくのではなく、自分で気づく力を身につけてほしい
- ・将来の自立において、自分でできることを増やす
- ・なぜ必要か、ただ実施するのではなく行為の意味づけ、目的を理解してほしい
- ・言葉かけを多くするのではなく、支援の方法で、生徒の「できる」を引き出したい

自分で気づく力

自分でできることを増やす

目的を理解してほしい

支援の方法で、生徒の「できる」を引き出したい



キーワード

個別の指導計画をもとにアプローチ項目を抽出

I 身体・健康面

身だしなみを整えたり、首回りのケアを一人で行ったりすることができる

↳ 首回りのケア = カニューレ固定バンドのゆるみ確認

II 学習面

両手を使った活動の中で、右手を使う頻度を高めることができる

#1 首回りの状態を、両手を使い自分で確認できる力
(気管カニューレ抜去のリスクに対してのアプローチ)

抽出した項目より立案した看護計画

- #1 首回りの状態を、両手を使い自分で確認できる力を育む
(気管カニューレ抜去のリスクに対するアプローチ)

自立を目指すための第一歩としての関わり

#1首周りの状態を両手を使い自分で確認できる力を育む

(気管カニューレ抜去のリスク状態へのアプローチ)

【短期目標】

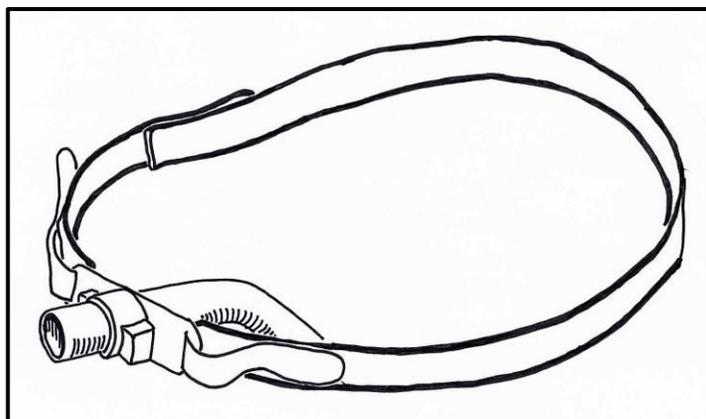
「抜けたらどうなるか」をくり返し学習する
「ゆるいとき」に他者へ適切な言葉で伝えることができる

1. 気管カニューレが抜けないようにする目的を理解できる

(健康の保持2・4、人間関係の形成3)

2. カニューレ固定バンドの「ぴったり」「ゆるい」が分かる

(人間関係の形成3、身体の動き5)



カニューレ固定バンド

毎日、短時間でくり返し学習することで、短期記憶から長期記憶へ移行できるようにアプローチ

指導の手続き

【登校時】

1. カニューレ固定バンド(以下、固定バンドという)を、看護師が確認する
2. 生徒の指を一本ずつ固定バンドの左右に入れ、「ぴったり?ゆるい?どっち?」と発問する → 評価ポイント
3. 必要時、固定バンドを調整し「ぴったり」とし、生徒に「ぴったり」を確認してもらう
4. 固定バンドの上に、(教材B)を緩く巻き、「ゆるい」の感覚を提示し、指の感覚で感じる
5. カニューレが抜けたらどうなるかを書いたイラスト(教材A)を用いて説明する

「ぴったり」「ゆるい」の学習



教材A



教材B

子どもの学びの評価

【評価基準】

○…「ゆるい」の状態の時に、「ゆるい」と言える(2点)

△…悩んで答えがでない、迷う、わからない(1点)

×…全く一致していない(0点)

【達成基準】期間中、○(2点)が8割以上

【中止基準】連続して×(0点)が5日間

教材A



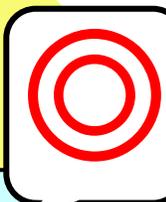
指導の手続き(教材A変更)

【実施11日目~】
評価を下校時から登校時へ

変更①

変更②

変更③

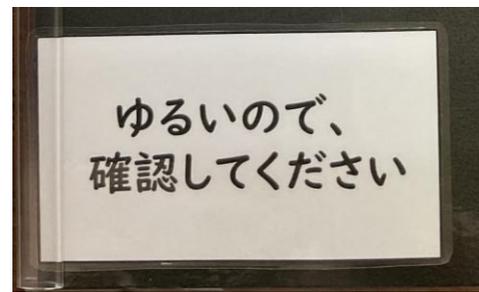


【実施5日目】
曖昧な表現ではなく、実際に伝える言葉に変更

教材A

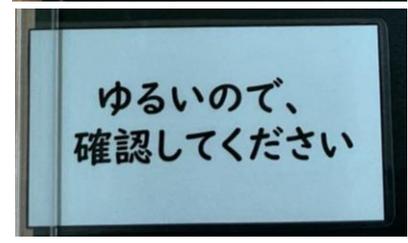


教材A

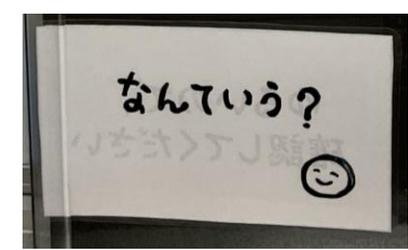
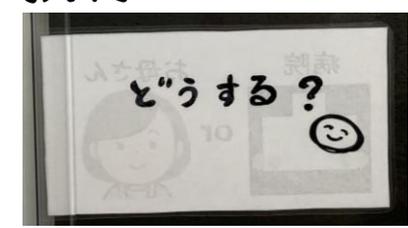


【実施1か月頃~】
3枚目、4枚目を裏返しゲーム感覚で発問

教材A



教材A



実践の経過と評価

ゆるい時「ゆるい」と言えた回数

◎達成

14回 / 16回中 = 87.5%

- ・1日に3回（登校時、昼食時、下校時）実施しているが、評価は登校時のみとしている
- ・「ぴったり」の状態の時に、生徒が「ゆるい」と答えたことあり
- ・その場の雰囲気や会話の間の取り方などで、看護師の判断を感じ取り、生徒の答えが誘導される場合があるため、発問や間の取り方については看護師間で共有し、できる限り生徒が誘導されず自分で判断できるような対応としている

指導の成果

【レティナ変更初日】



「オーマイガーの姿勢」で

レティナ抜去



自分で気づき、近くの教員に、気切部を指さし伝える

【2日目】

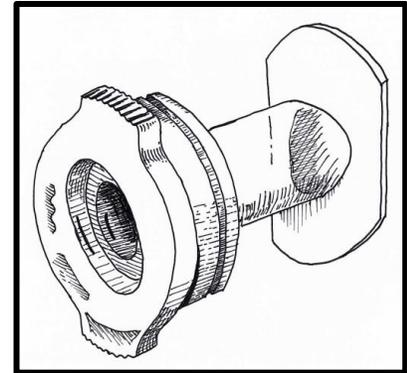
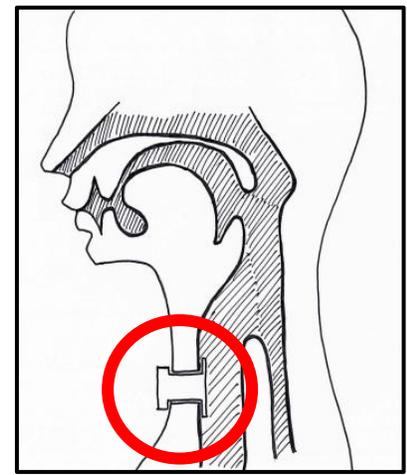


「片手を高く上げる姿勢」で

レティナ抜去



授業中、担任に「おかしい」と伝える



レティナ

- ◎レティナが抜けたことに気づくことができた
- ◎おかしいと教員に伝えることができた



卒業までの5年計画(案)

担任と共有

中2
(1年目)

中3
(2年目)

高1

高2

高3

今回の取り組み

コンサルテーションによるアドバイスを受け追加

- ・気管カニューレが抜けると、どうなるかを理解できる
- ・固定バンドの「ゆるみ」が分かる

今回の取り組み
自立におけるの
第一歩

- ・定時に促しなく、固定バンドの確認が自分でできる
- ・体育の後など、ゆるみやすい時に、自分で「確認しよう」と、気づくことができる

自主的に実施
イレギュラー時へも対応

・「ゆるみ」時の対処法を知る

- ・自発的に他者へ、固定バンドの調整を依頼できる

- ・「ゆるみ」時、自分で固定バンドを直すことができる

手の巧緻性、麻痺の状態を考え、安全面に配慮しながら実施する
ST、PT、OT、
保護者との連携

医師を含む、他職種との連携
保護者の意向、協力

自立への最終目標

自分で
カニューレ交換



ここが成功のポイント

担任とのクロスファンクショナルな連携の実現

(異なる専門領域が壁をこえて協力し、共通の目的に向かって動く連携)

| | |
|--|---|
| <p>「健康の保持」</p> <p>・カニューレ固定バンドの「ぴったり」「ゆるい」を、両手を使って確認し「ゆるい」が分かる。</p> <p>(I-②、II-①) (健-2、身-5)</p> <p>担任・看護師</p> | <p>・以下の手順を進める。</p> <p>①生徒に固定バンドを確認するよう伝える。(首に沿わずよう、両手1本ずつの指を固定バンドの左右に入れる。)</p> <p>②「ぴったり?ゆるい?どっち?」と発問する。</p> <p>③必要時、看護師が固定バンドを「ぴったり」の状態にし、生徒に確認するよう伝える。</p> <p>④固定バンドの上に教材を巻き、「ゆるい」状態にする。生徒に確認するよう伝える。</p> <p>・「ゆるい」状態のときに、期間中8割以上「ゆるい」と答えることができれば達成とする。</p> |
|--|---|

- ・個別の指導計画「自立活動」「健康の保持」として立案、実践
- ・担任との連名で立案
- ・年度末に評価予定

看護実践の見える化

ここが成功のポイント

チームティーチングの実践

協働の質に焦点をあてたTT

